

こころを、酌み交わそう。

和組

WA-GU-MI

月桂冠
プレミアム
倶楽部
Vol.

19



特集

折形

◎山口信博 ◎美しく贈る、礼のかたち

和傘の魅力を触れるに



おふたりに迎えてくださったのは日吉屋の五代目当主、西堀耕太郎さんです。日吉屋ではミニチュアの和傘づくりが体験できるということで、まずは工房の三階に案内されました。「ミニチュアですが傘張りの工程は実際とはほぼ同じです。体験していただくことで和傘の構造や職人の手順がご理解いただけると思います」と西堀さん。おふたりは早速用意された骨組みを聞いてはじめて骨の間隔が均一になるように揃えます。骨組みの準備ができたら和紙を選びます。奥さまは桜の花びらが風に舞っているような「桜渦」を、ご主人は小さな蜻蛉がたくさん飛んでいる「蜻蛉渦」の柄を選ばれました。

和紙を骨組みに張っていきま。刷毛を使って骨の上に糊を置くような感じで塗ります。「障子張りかと思えますね」と奥さま。全部の骨に糊が塗れたら、ロクロと呼ばれる傘の頭に和紙の中心の穴を通して紙をかぶせます。実際の傘づくりでは何枚にも裁断した和紙を職人が手際よく張り合わせていきますが、ミニチュアの場合は一枚です。手で軽く押さえて紙を骨に馴染ま

内側に折り返していきます。傘張り体験の中で一番こまかい作業です。おふたりとも指先に神経を集中して、紙を折り返していけます。一周したら、これで主な作業は終了です。糊を乾かしている間に、階下の作業場を見せていただくことになりました。

竹と和紙から生まれる幾何学的な美しさ

日吉屋では祝の目傘や番傘、お茶の時に使う野点傘などの製造と修理をしております。工房には張り上がった番傘や、修理中の古い和傘が台に立てられ、花が咲いたよう。そんな様子を見て奥さまが「嫁入り道具の筥笥の中にも番傘を入れましたよ」と嬉しそうに話されます。和傘の材料は竹や和紙などの天然素材です。竹は岐阜の真竹と真綿竹を、和紙は傘に合わせて福井の越前和紙、富山の五箇山和紙、岐阜の美濃和紙を使い分けておられます。和傘も他の伝統産業と同じように分業制で、専門の職人が竹骨や和紙、ロクロなどを作ります。この工房では竹骨を糸でつなぎ骨組みを立てて、裁断した和紙を張って傘に仕上げっていきます。「一本の竹を均等に割り、割つ



堀川舟の宝庫前門にある日吉屋。



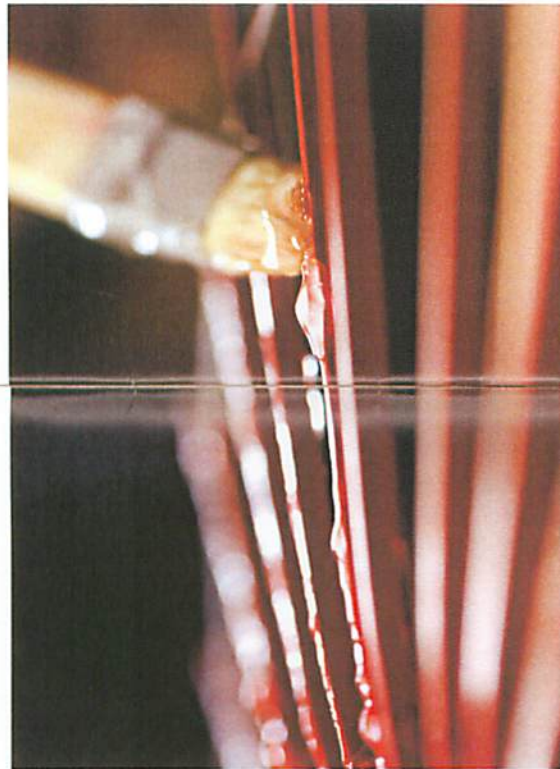
実物の傘を見ながら西堀さんから説明をお聞き。その精巧な職人技に見入っておられました。



職人技の和傘。職人の職人技で張っています。真ん中を上げるには、手際が大切です。



和傘の美しいインテリアに生かす。オリジナルの和傘。【伝統は革新の源流】と西堀さん。



竹骨一本一本に糊をつけていきます。



糊が乾いたら、和紙を内側に張りつけ、折り目を付けて形作ります。



傘の外側に張られた材料糸を切らないように、和紙に切り込みを入れ、内側に折り返していきます。

傘をたたまみ、頭のロクロ口部分に【カッパ】と呼ばれる飾り糊紙を付けて糸で縛れば完成です。



せたら、竹べらを使って傘の中心から外へ骨をなぞって接着させます。

千年の歴史をもつ和傘

おふたりの作業を見守りながら、西堀さんが傘の歴史を紹介してくれました。「傘は平安時代前後に、仏教やお茶などと同じく中国から伝来したといわれます」。当時の和傘は開閉できないつくりで、雨具としてではなく、身分の高い人に差し掛けて日除けや魔除け、あるいは權威の象徴としたのだとか。その後技術が発達し、傘が開閉できるようになったのが安土桃山時代。一般庶民に雨具として広まるのは、和傘の製法が確立し、分業制が発達して安価で大量に作られるようになった江戸時代のこと。傘は浮世絵にも多く描かれ、歌舞伎や舞踊にたびたび登場することを見ても、広く普及していたことがわかります。「和傘はシンプルながら非常に高度な構造をしています」と西堀さん。その製法は江戸時代から、いまま変わっていないということです。

お話を聞くうちに、傘骨に和紙がしっかりと付いたので、次は紙の処理をします。傘の外周に張られた「軒糸」を切らないように、骨に沿って和紙に切り込みを入れ、

た順番に組み立てるので、傘を開いた時に元の竹のようにすっきりとした姿になるんです」と竹骨を手に西堀さん。骨の数は洋傘が通常八本なのに対し、和傘は三十本から七十本で、骨数が多いほど上等な傘になるのだとか。こまかい仕事で大変ですね」とご主人が竹骨に感心されています。日吉屋では、和傘の竹骨と和紙の美しさを現代の暮らしにもっと生かしたいと、オリジナルの灯りも開発。和モダンの斬新なデザインは海外でも人気だそうです。

ミニチュアの傘の糊が乾いた頃なので、戻って仕上げの作業を進めます。傘をすばめて、指の腹で和紙に折り目をつけると次第に傘らしい形になりました。後はたたくでカッパを付け、糸で縛ってでき上がり。「傘は末広がりの縁起物なので、玄関などに飾ってください」と仕上げた傘を手渡されたおふたり。「いい記念になりました」「孫たちにも傘づくりを体験させたいですね」と京都の旅を堪能されたようでした。



手作りのおふたりにミニチュア和傘ができました。